

浄土宗と『無量寿経』

齊藤 舜健

浄土宗所依の経たる浄土三部経の第一番目に置かれるのが『無量寿経』（以下、『寿経』）である。開宗の文の最後の一句「願彼仏願故」の仏願が示され、法然の提唱した選択本願念仏の「選択本願」の経緯を示す經典である。

本稿では、『寿経』の所説を概観し、法然が『寿経』をどのように用いたのかを確認したい。なお『寿経』では仏名に主として「無量寿仏」、国土名に「安養」「安樂」を用いるが、本稿では便宜上、阿弥陀仏と極樂を用いる。

一、『無量寿経』のテキスト

阿弥陀仏の因位である法蔵菩薩が本願を選択した経緯は『寿経』に説く弥陀本生譚、すなわち法蔵説話に示される。『寿経』では、続いて本願が成就して成立した阿弥陀仏・極樂世界、阿弥陀仏の衆生済度の様相が説かれる。こういった二連の内容を持つ經典は複数現存し、無量寿経類とされる。それらは次のとおりである。

漢訳は「十二回の翻訳がありそのうち五本が現存する」という「五存七欠」の説がある（凝然『浄土法門源流章』

浄全一五、五八四上)。五存とは次の五本である。

- (一) 『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』(『大阿弥陀経』と略称) 二卷、呉・支謙訳(黄武年中、建興二／二二一～二五三。異説あり)
- (二) 『無量清浄平等覚経』四卷、後漢支婁迦讖訳(実際は魏・帛延(白延)、異説あり)
- (三) 『無量寿経』二卷。訳者については後述する。
- (四) 『大宝積経』「無量寿如来会」(四十九会中、第五会) 二卷、唐・菩提流志訳(神竜二、先天二／七〇六、七二三年)
- (五) 『大乘無量寿莊嚴経』三卷、宋・法賢訳(淳化二／九九一年)

これに加えてサンスクリット本、チベット訳が現存する。(一)(二)を初期無量寿経、残りを後期無量寿経と呼ぶ。漢訳の期間と回数を見れば、無量寿経類の伝承が長期間に渡るものであったことが伺われる。無量寿経類はほぼ同一のストーリーを持つが、実際に読み比べてみるとそれぞれに特色がある。例えば本願の数は(一)(二)が二四、(三)(四)が四八、(五)が三六、梵本四七、チベット訳四九と異なり、内容や配列にも異なりがある。また三毒五悪段は(一)(二)(三)のみにしか存せず、(一)(二)には四誓偈が無く、また阿弥陀仏が入滅することを説く等々、多くの相違点がある。そして、それぞれが独自の内容を展開させていて、阿弥陀仏の信仰に広がり濃厚のあったことが伺われる。この内、(三)が浄土宗所依の『寿経』である。

『寿経』は、『開元釈教録』二によれば、曹魏の嘉平四年(二五二)に康僧鎧が洛陽の白馬寺で訳したと伝えられる(正蔵五五、四八七上)。これを根拠として浄土宗を始め浄土系各宗派では、曹魏天竺康僧鎧訳を訳者名として用いる。曹魏の訳出とされることから略称に「魏訳」を用いることもある。この伝統説に対しては根拠とされる『開

元釈教録』の記事の信憑性などから疑問が提出されている。それに対して、竺法護訳説や仏陀跋陀羅・宝雲共訳説が提出されており、後者が現状では最も有力な説である。⁽¹⁾

仏陀跋陀羅・宝雲共訳説を採った場合、四二二年、劉宋の建康での訳出とされる。『阿弥陀経』が弘始四（四〇二年）、『観経』が劉宋の元嘉年間（四二四～四五三年・訳出年次は四三〇～四四二年に狭め得る（藤田二〇〇七、一六五頁））の訳出と考えられるので、『寿経』は『阿弥陀経』と『観経』の間に訳出されたことになる。『観経』に「法藏比丘願力所成（華座觀）」「亦說法藏比丘四十八願（中品下生）」と『寿経』の影響を想定させる記述があることから、この訳出時期が支持されよう。

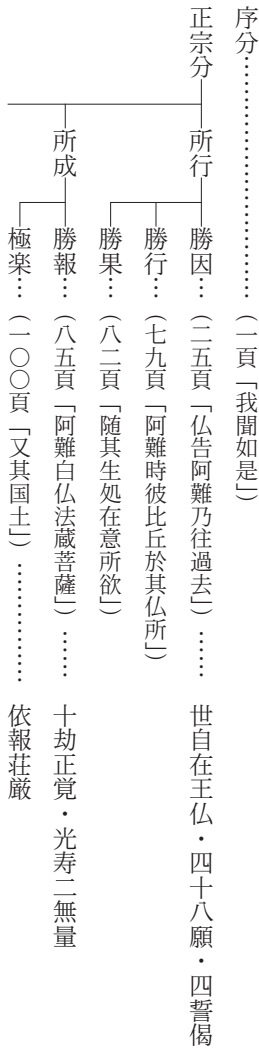
浄土宗において現在依用する『寿経』は、『浄土宗聖典』（以下、聖典）一卷所収本である。漢字表記の底本に嘉永五（一八五二）年刊の大雲校訂本（大雲点本の初版）を用い、音読には文化十二年刊の音激校訂本を用いたとされる（聖典一、凡例、二頁）。流布本の系統である。『寿経』は各種の大蔵経に収められ、また敦煌本や日本写本が存する。これらを網羅した異同は、藤田二〇〇七所収の「浄土三部経の諸本対照表」を参照されたい。

本稿において『寿経』を示す場合、前記の大雲校訂本の影印本（昭和五九年少僧都養成講座用教本として編集）に付されたアラビア数字の頁番号による。この頁番号は、一面四行一七行詰の折本仕立ての頁番号に相当する。

二、『無量寿経』の構成と内容

二一、『無量寿経』の分科

浄土宗における『寿経』の分科は、序分・正宗分・流通分の三分科とし、正宗分を浄影寺慧遠『無量寿経義疏』上（浄全五、二八上下）に従い、所行・所成・所撰に三分する（大科）。正宗分は、善導『観経疏』「序分義」の「弥陀の本国は四十八願よりす。願願、皆、増上の勝因を發す。因に依て勝行を起し、行に依て勝果を感じ、果に依て勝報を感成し、報に依て極樂を感成し、樂に依て悲化を顕通し、悲化に依て智慧の門を顕開す（浄全二、二八上）」に従い、勝因・勝行・勝果・勝報・極樂・悲化・智慧の七科（小科）に分かつ。この七科は、大科の所行に勝因と勝行と勝果が、所成に勝報と極樂が、所撰に悲化と智慧が、それぞれ配される。『寿経』全体についての細目は、了慧道光『無量寿経鈔』による（細科）。以上の三分科と大科・小科にそれぞれの主要な内容を添えて図示すると次のようになる。



「所撰」悲化…（一三四頁「仏告阿難具有衆生」）…第十八願成就・三輩段・三毒五惡段
智慧…（二四〇頁「仏告阿難」）…胎生往生
流通分…（二六二頁「仏告弥勒其有得聞」）…念仏利益・独留此経
以下、この構成に従って内容を考察したい。

二二二、『無量寿経』の所説

一、序分

他の諸経典と同様、『寿経』は釈尊説教の場面設定Ⅱ会座の描写から始まる。

まず、説教の場所が、王舎城近郊の耆闍崛山であったことを明かし、続いて会座に集った大衆を列挙する。万二千人の比丘の上首として三十一聖の名を挙げる。続いて普賢を始めとする菩薩たちを挙げる。彼らが釈尊の生涯を演じて見せることができるほど勝れた菩薩であることを八相示現（了慧は九相とする）を辿りながら明らかにし、このような菩薩たちが数え切れないほど集まっていたと描写される。ここに登場する菩薩は「皆遵普賢大士之徳（五頁）」とされるので、第二十二願（必至補処願）の適用が除外される菩薩である。菩薩に関する記述は、序分のうち、正発起を除く部分の九割近くを占める。無量寿経類の内『寿経』と『如来会』のみに見られる。

この直後、釈尊は『寿経』を説き始めるきっかけを演出する（正発起）。釈尊が金色に輝く姿（光顔巍巍）を示すと、阿難は「これほど神々しい釈尊の姿を目にしたことがない（二二頁）」と称讃し、「仏同士が互いに互いすることに思いを馳せており（仏仏相念）、釈尊自身も他の仏に思いをはせているはずだ（二二～二三頁）」と述べてから、神々しい釈尊の姿の故を問う。釈尊はその質問が誰かに教えられたものかどうかを阿難に尋ね、阿難は自ら見

たことに基づいて質問したのだと答える。釈尊が、この問いは衆生を利益するものであると称讚し、答えてやろう、と言うと、阿難はお聞きしたいと申し上げ、いよいよ正宗分が始まることになる。

二、正宗分

二―一、明所行：法蔵説話

二―一―一、勝因

正宗分冒頭の「所行」は、阿弥陀仏の因位である法蔵菩薩について明らかにする（法蔵説話）。その冒頭の「勝因」には、法蔵菩薩の登場から四十八願の建立までが説示される。本願が選択される経緯と「順彼仏願故」の仏願たる第十八願が示される。

釈尊は阿難の要請を承けて、本経の主題を説き始める。「正発起」において阿難が想像したとおり、おそらくは釈尊が思いをはせていたであろう仏、すなわち阿弥陀仏について語る。その導入としてはるか過去の仏：錠光如来から説き始める。

はるか昔に錠光如来が登場し、衆生を済度した後、入滅する。その後、錠光如来を含めて五十三の如来が、出現、衆生の済度、入滅を繰り返し、第五十四番目の如来として世自在王仏が登場する。彼と同時代のある国王はその教えを聞き、大変に感動し、国を捨てて出家し法蔵という沙門となる。法蔵比丘は偈頌を以て世自在王仏讃歎する。「歎仏頌」である（三一～三六頁）。

・法蔵菩薩の発願：歎仏頌

「歎仏頌」では、最初に「光顔巍巍」と、世自在王仏を讃歎する。この讃歎は単に世自在王仏を讃えるだけでなく、つづく法蔵が成仏を願う冒頭に「願我作仏 齊聖法王」と述べるように、法蔵自らが願う仏の姿を世自在王仏に範を取って提示するためのものである（以上、撰法身願）。続いてさらにあらゆる諸仏の国土の中で自らが作仏した国土を最高のものとし（撰浄土願。「譬如恒沙 諸仏世界 令我作仏 国土第一」、すべての衆生を済度したい（撰衆生願。「我当哀愍 度脱一切」と願う。最後に世自在王仏と十方諸仏に証明を請い（幸仏信明 是我真証）、法蔵自身の決心（忍終不悔）を述べて終わる。

・「選択本願」

「歎仏頌」において撰法身・撰浄土・撰衆生の三願が示されたが、具体的な内容は示されていない。法蔵は具体的にどうすべきかを世自在王仏に問うが、一旦は「自分で考えよ（汝所修行 莊嚴仏土、汝自当知」三七頁）」と拒否される。法蔵は再度「広く諸仏如来の浄土の行を敷演してほしい（三八頁）」と要請する。世自在王仏はこれを承けて、「二百一十億の諸仏刹土の天人之善悪、国土の微妙（三九頁）」を示し、法蔵菩薩の願いに沿ってそれらをすべて現して与えた（応其心願 悉現与之 四〇頁）。その後法蔵は、五劫という長い時間をかけて思惟を重ね（五劫思惟）、最終的に自らの願いにふさわしい行「莊嚴仏国清浄の行」を「撰取」した（四〇頁）。その後、法蔵は世自在王仏のもとに出向き、「莊嚴仏国清浄の行」を「撰取」したことを告げると、世自在王仏は「ここで説くように。会座の菩薩たちがそれらを聞くと、それぞれがその願を成就するであろうから（四二頁）」と命じる。これを承け、法蔵は四十八願を説示する。法蔵が本願を選択した経緯はこの箇所に表示されており、法然は『選択集』第三章私釈

段（聖典三、二〇～二二頁）に、錠光如来登場から諸仏妙土清浄之行を撰取するまでを抄出する。世自在王仏が示した具体例から抽出したのだから、法蔵は取捨選択をしたことになる。この点を『寿経』では「撰取」と表現して、これは「取る方ばかり（義山『無量寿経随聞講録』上二、浄全一四、二九五下）である。『選択集』同箇所引用される『大阿弥陀经』の対応箇所では「撰取」ではなく「選択」と表現される。法然は「選択とは即ち是れ取捨の義（同二三頁）」とし、四十八願一つ一つに、善妙のものを選択し鈍悪のものを選択する取捨の義があることを、第一無三悪趣願から第四無有好醜願を例として示し、第十八願にも同様に取捨の義があるとす³⁾る。

・四十八願

四十八願それぞれに名称を付す場合、注釈者の理解によって異なる名称となる。浄土宗では、伝統的に了慧『無量寿経鈔』三、四の願名を用いる。以下のとおりである。

- (一) 無三悪趣願（四三頁）、(二) 不更悪趣願（四三頁）、(三) 悉皆金色願（四三頁）、
- (四) 無有好醜願（四四頁）、(五) 宿命智通願（四四頁）、(六) 天眼智通願（四五頁）、
- (七) 天耳智通願（四五頁）、(八) 他心智通願（四六頁）、(九) 神境智通願（四七頁）、
- (一〇) 速得漏尽願（四七頁）、(一一) 住正定聚願（四八頁）、(一二) 光明無量願（四八頁）、
- (一三) 壽命無量願（四九頁）、(一四) 声聞無數願（四九頁）、(一五) 眷属長寿願（五〇頁）、
- (一六) 無諸不善願（五一頁）、(一七) 諸仏称揚願（五一頁）、(一八) 念仏往生願（五二頁）、
- (一九) 来迎引接願（五三頁）、(二〇) 係念定生願（五三頁）、(二一) 三十二相願（五四頁）、
- (二二) 必至補处願（五四頁）、(二三) 供養諸仏願（五六頁）、(二四) 供具如意願（五七頁）、

- (二五) 説一切智願(五七頁)、(二六) 那羅延身願(五八頁)、(二七) 所須嚴淨願(五八頁)、
- (二八) 見道場樹願(五九頁)、(二九) 得弁才智願(六〇頁)、(三〇) 智弁無窮願(六〇頁)、
- (三一) 国土清淨願(六一頁)、(三二) 国土嚴飾願(六二頁)、(三三) 触光柔軟願(六三頁)、
- (三四) 聞名得忍願(六四頁)、(三五) 女人往生願(六四頁)、(三六) 常修梵行願(六五頁)、
- (三七) 人天致敬願(六六頁)、(三八) 衣服隨念願(六七頁)、(三九) 受樂無染願(六八頁)、
- (四〇) 見諸仏土願(六八頁)、(四一) 諸根具足願(六九頁)、(四二) 住定供仏願(六九頁)、
- (四三) 生尊貴家願(七〇頁)、(四四) 具足徳本願(七一頁)、(四五) 住定見仏願(七二頁)、
- (四六) 隨意聞法願(七三頁)、(四七) 得不退轉願(七三頁)、(四八) 得三法忍願(七四頁)

法藏の建立した四十八願は、淨影寺慧遠『無量寿経義疏』上(淨全五、二七上下)の説に基づいて、摂法身(一二、一三、一七願・仏身自身に関する)、摂淨土(三一、三三願・建立された国土に関する)、摂衆生(残りの四三願・衆生済度に関する)の三願に分類される。聖問はこの三願をベースとし、次第の七重、不次第の七重の二種の分類を示す(『釈浄土三蔵義』二十二。淨全一二、二五四上下)。次第の七重とは、四十八願の順序に沿って三願を配当すると七重(一〜一二、一三〜一四、一五〜一六、一七、一八〜三〇、三一〜三三、三三〜四八)となるというものである。

不次第の七重は摂衆生願の対象を細分したものである。摂衆生願の対象を、凡夫と聖人、聖人については菩薩と声聞、凡夫と菩薩についてそれぞれ自国と他国とに分類し、次のようになる。

- ・(一) 摂法身願…一二、一三、一七

- ・(二) 撰浄土願…三一、三二
- ・撰衆生願
- ・撰凡夫願
- ・(三) 撰自国願…一〇、一五、一六、二一、二七、三八、三九
- ・(四) 撰他国願…一八、二〇、三三、三五、三七(この七願を撰機の願という)
- ・撰聖人願
- ・(五) 撰声聞願…一四
- ・撰菩薩願
- ・(六) 撰自国願…二三、二六、二八、三〇、四〇、四六
- ・(七) 撰他国願…二二、三六、四一、四五、四七、四八

・それぞれの願について

すべての願文は、第一、無三悪趣願「設我得仏、国有地獄餓鬼畜生者、不取正覚」のように、「設我得仏」と「不取正覚」の間に内容を挟みこむ共通した形式である。「不取正覚」が添えられるこの形式が、法蔵が成道した場合にこの願が成就していることを保証する。法然は「不取正覚」の語と、所成の段の冒頭の「十劫正覚」(法蔵がすでに成仏したことを示す)を願成就の根拠とする(『選択集』第三章私釈段、聖典三、二八頁)。

紙数の都合上四十八願のすべてを解説することはできないので、(一) 撰法身願と、(四) 撰衆生願の撰他国凡夫の願からいくつか検討する。

撰法身願の内、第十二光明無量願と第十三寿命無量願は、成仏した際の自身の光明の広がりや寿命の長さが限量されないほどこにしたい、という願である。阿弥陀仏の梵語名は、Amiṭṭha（無量光）と Amitāyus（無量寿）のみが知られており、この二願は阿弥陀仏の梵語名に対応する。阿弥陀仏の働きの空間的無限性を保証するのが光明無量（法然は「一切衆生にことごとく縁を結ばしめんがために、光明無量の願を立てたまえり」（『三部経釈』、『和語灯録』一、聖典四、二八七頁）と言う）、時間的無限性を保証するのが寿命無量と位置づけることができる。もう一つの撰法身願である第十七諸仏称揚願は、「悉く咨嗟して我が名を称せずんば」とのべて、次の第十八念仏往生願へとつづく。法然は「名号をもて因として衆生を引接したまう事を一切衆生に遍く聞かしめんがために」第十七願を建立したという（『三部経釈』、前掲箇所）。第十八念仏往生願の前提として聞名を設定し、そのために第十七願を置くところである。ちなみに『無量寿如来会』も第十七諸仏称揚願、第十八念仏往生願と連続するが、『無量寿如来会』の第十八願では「我が名を聞き已て、乃至十念せんに（浄全一、一四六下）」と、聞名が明示される。

さて、第十八願を「念仏往生願」という。全文は「設我得仏、十方衆生、至心信樂欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覺。唯除五逆誹謗正法（五二頁）」である。十念を十声と理解すると、次の内容になる。「あらゆる世界の衆生が、真実のこころをもつて深く信じて極樂への往生を願ひ、十遍南無阿弥陀仏と称えたにもかかわらず、往生しないということが無いようにしたい」。五逆を犯したり仏法を謗った者を例外とすることが付言される。第十八願こそ、南無阿弥陀仏と称えると必ず往生するという浄土宗の教えの根拠であり、最重要の願である。法然は『選択集』第三章に「本願中之王（聖典三、四〇頁）」という。願文の語句は次のように解釈される。前半の「至心」「信樂」「欲生我国」をそれぞれ至誠心、深心、廻向発願心の三心に配当する。「乃至十念」を「下至十声」と読み替える。「乃至」とは「上尽一形下至十声一声等」のことであり、「十」という数に限定しない。「念」を「声」と

解し、口称の念仏とする（『念声是二』、『選択集』三章、聖典三、二八頁）。このように理解することで、三心具足の念仏で往生することが誓われていることになる（良忠『決疑鈔』二（浄全七・二三五））。末尾の「唯除五逆誹謗正法」の例外規定は、抑止の立場から五逆誹法を除外したもので、実際には往生する、と理解する。

「乃至十念」の対応箇所は、無量寿経類の内、『寿経』『無量寿如来会』のみにある。『大阿弥陀経』『平等覚経』には「十念」に対応する語はなく、むしろ聞名による往生を説く（『大阿』第四願、浄全一、一〇五下）。また梵本、チベット訳では「乃至十念」に相当する箇所を [antaṣo daśabhiḥ cittoṣṭāpāparivartaiḥ（たとえ十回、心を発すことによつて）] (Fujita2011 p.18) としていて、口称の念仏を説かない。しかし善導が「乃至十念」を「我が名字を称すること下十声に至るまで（『観念法門』浄全四、二三三）」と解することを承認し、念を声の意味と捉えることで、口称の念仏での往生が誓われていると理解する。

つづく第十九来迎引接願では、往生を願う者の臨終に、阿弥陀仏が聖衆と共に来迎する、と誓われる。凡夫は命終時に、仏の来迎によって正念に住することができ、来迎がなければ正念が妨げられるので、この願が誓われたという（『無量寿経鈔』三、浄全一四、九二頁）。従つてあくまでも来迎を誓った願であり、往生を誓う願（生因の願）ではない。聖阿は、生因の本願は第十八願であり、第十九願は念仏の人を来迎することを目的とする（『釈浄土二藏義』二十四・浄全二一・二七七）。

第二十係念定生願では、阿弥陀仏の名号を聞いて、極楽に念いを係け、様々な功德を修し、至心に回向して往生を願うと往生ができる（果遂）、と誓われる。ただし念仏するわけではない。一旦極楽（阿弥陀仏）に念いをかけると、いつかは念仏し、その結果、往生がかなうという。良忠は「遠生果遂願」「順後往生願」と呼び、「聞名係念植諸徳本は現在生に約し、至心回向は第二生に在り、果遂は則ち第三生に当たる（良忠『東宗要』二・浄全一一、四

六」として、第二十願による往生が順次往生（今生の命終の直後に往生）ではなく、順後往生とする。

以上の第十七願から二十願への流れは、諸仏称揚により阿弥陀仏の名号を聞き（聞名）、仏名を称える（乃至十念）することで往生が遂げられる。その際、行者の臨終には来迎して正念に任せしめ、あるいはその時に念仏しなくても、将来、念仏して往生を遂げることになる、というものである。

そして念仏往生を遂げた者は、必ず仏となることが確定すると誓われたのが第十一住正定聚願であり、さらに第二十二必至補処願によって、多くは一生補処になるとされる。聞名から始まり、菩薩道の完成までが、すべて四十八願の内部で完結する。

・四誓偈

法蔵は四十八願を説いた後、これらの願の成就を改めて誓い、願成就の証明を請う（請証）ために、十一行立ての偈頌を説く。浄土宗ではこれを「四誓偈」と呼ぶ。二祖弁長が、第一行～第三行の「誓不成正覚」の三誓に加えて第十一行目の「此願若剋果」の「願」を誓とみなして、合計四誓があるとしたことによる（『西宗要』五（浄全一〇、二二九下～二三〇下）。四誓偈の説示は法蔵自身が四十八願を説示したことが前提となるので、本願を『二十四願経』として釈尊が説示する『大阿弥陀経』『平等覚経』に四誓偈はない。

四誓偈の内容は右の通りだが、全体の構成についての浄土宗列祖の解釈には、次の二種類がある。

・（一）法蔵自身が建立した願の成就を誓う（第一行～第三行、或いは第四行）、（二）世自在王仏の仏徳を挙げ、それを目標として求める、（三）願成就の証明を求める。

・（一）法蔵自身が建立した願の成就を誓う（第一行～第三行）、（二）自身が成仏した時の徳を挙げて求める、

(3) 願成就の証明を求める(請証)。

前者は『無量寿経鈔』『無量寿経合讚』『無量寿経随聞講録』に示され、後者は弁長『西宗要』五(前掲箇所)に示され、『無量寿経随聞講録』にも引かれる。ちなみに梵本でも両者の読み方が可能となる(梵本では(一)を第四行までとする。藤田一九九四、一四五頁)。

第一行目の請証を承け、四誓偈の直後に、三千大千世界が六種に震動し虚空から華が降り、空中からは「決定必成無上正覚」と聞こえたと述べる(七八頁。この部分は異訳では偈頌の形式とするため、十二行立ての偈頌となる)。

二一一―二、三、勝行と勝果：兆載永劫の菩薩行

四誓偈直後に願成就の証明を述べるところまでが勝因である。その後法蔵は願を成就するために「不可思議兆載永劫(七九頁)」にわたって菩薩行に邁進する。その菩薩道の内容として、自ら六波羅蜜を行じ、他者に六波羅蜜を行ぜしむることを説く。以上、「勝行」である(七八―八二頁)。

そして菩薩道を行じて輪廻を繰り返す中、法蔵は長者、国王、ないし六欲天主や梵王などのすぐれた境遇を得た(「勝果」、八二―八四頁)。

二一二、所成：阿弥陀仏と極楽

四十八願を建立し菩薩行を行じた結果(以上、所行)、法蔵は成道し、仏国土を建立した。その有り様が「所成」に示される。それは「勝報」と「極楽」に分けられる。「所成」と「所撰」とは、「所行」に示される法蔵菩薩の願と行を承けての説示であり、所成の中の特に「勝報」には四十八願に対応する内容が随所にみられる。法然は『三

部経釈』に「『双卷経』にはまず阿弥陀仏の四十八願を説く。後に願成就を明かせり（『和語灯録』一、聖典四、二八三頁）」というように、『寿経』の内容を四十八願とその願の成就という対応関係として捉える。法然が願成就を指摘するのは、念仏往生願、無三悪趣願、不更悪趣願、具三十二相願など限られた願の成就であるが、後代になると義山『無量寿経随聞講録』等では、願文との対応個所を願成就として多く指摘するようになる。紙面の都合で一々は指摘しないが、指摘する場合は義山『無量寿経随聞講録』に「成就文」「願成就」として指示されるものによった。

二二二一、勝報

所行の説示を受けて阿難は、法蔵が、(一) 已に成道して入滅してしまっただか、(二) 已に成道して現に在るか、(三) 未だ成道していないか、と問う。釈尊は、已に十劫の昔に成道して(十劫正覚)、西方安樂世界(『寿経』に於ける極楽の訳語)に現在するという(八五〜八六頁)。

続いて極楽について、七宝の所成(第三十二国土嚴飾願成就)であり、須弥山や金剛鉄围山を始めとする山や谷や海が無く(但し見ようと思えば見ることはできる)、地獄餓鬼畜生諸難之趣が無く(第一無三悪趣願成就)、春秋冬夏の四季が無い、と説く(八六〜八九頁)。

続いて阿弥陀仏の光明について説く(第十二光明無量願成就)。この節冒頭に阿弥陀仏の仏名として「無量寿仏」という仏名が置かれる(初出)。阿弥陀仏の光明が最尊第一であるとした上で、諸仏の光明が照らす範囲を説く(九〇〜九二頁)。次に阿弥陀仏の光明に関して「無量光仏・無辺光仏・無礙光仏・無対光仏・焰王光仏・清淨光仏・歡喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏」の十二の異名を挙げる(九一〜九二頁)。

この光明に遇う者は、「三垢消滅身意柔軟（第三十三触光柔軟願成就、九二頁）」となる。そして三塗勤苦の処にあってこの光明を見れば苦しみが息み、寿終の後、解脱を蒙るといふ（九二頁）。この「解脱」について、了慧『無量寿経鈔』、観徹『無量寿経合讚』、義山『無量寿経随聞講録』といった浄土宗の主要な註釈書では「往生を指す」とする。続いて阿弥陀仏の光明を讚歎し尽くすことはできず、阿弥陀仏の光明の威神功德を称説した者は、後に作仏してから、十方の諸仏菩薩に自身の光明が歎げられる、という讚歎の連鎖の構造が示される（九二〜九五頁）。

次に阿弥陀仏の寿量は長久であつて、計算したり、その限極を知ることができず（第十三壽命無量願成、九五〜久六頁）、声聞・菩薩・天人といった眷属の寿量についても同様であり、数や譬喩で知ることができない（第十五眷属長寿願成就、九六頁）。阿弥陀仏の初会の声聞衆の数は数えることができず（第十四声聞無数願成就、九七頁）、菩薩も同様であるとす。

二二二、極楽

続いて、ここまでの仏菩薩の描写に続いて安楽世界とそこにいる衆生について述べる。宝樹・道場樹（第二十八見道場樹願成就）・講堂・宝池・宮殿について説明し、続いて極楽の衆生の肉体・衣服・飲食、極楽の菩薩声聞の容姿、極楽の人天の享受する楽、光から出現する仏などを説明する（一〇〇〜一三三頁）。

二二三、所撰

二二二一、悲化

『寿経』巻下冒頭から正宗分の所撰である。先に悲化を明かし、ついで智慧を明かす。悲化の段では、順次に凡

夫の往生、聖人の往生、厭欣の境界を明かす。

・凡夫の往生：第十八願成就と三輩段

凡夫の往生を明かす中、冒頭から順に、往生した者がすべて「正定聚」⇨不退転の菩薩となること（第十一住正定聚願成就）、十方の諸仏が阿弥陀仏の威神功德の不可思議なることを讃歎すること（第十七諸仏称揚願成就）、阿弥陀仏の名号を聞いて（聞名）信心歓喜して乃至一念して往生を願うと往生し、不退転となる。五逆と誹謗正法の者は除く（第十八念仏往生願成就）と続く（一三四～一三五頁）。第十七願文の「称我名者」を成就文に読み込むならば、第十七願によって提示された仏名を聞いた（聞其名号）者が、乃至一念すれば第十八願により往生して不退転となる、という構造を示す。

続いて、往生人を上輩（出家者、真仏の来迎）、中輩（在家者で功德を積む者、化仏の来迎）、下輩（在家者で功德なし、夢見彼仏）の三類に分類して示す（一三六～一四二頁）。この段を「三輩段」という。法然は全体を第十九来迎引接願成就と見なす（『三部経釈』、『和語灯録』一、聖典四、二八六頁）。全体に諸行を説くが三輩に共通する「一向専念無量寿仏」⇨念仏こそが往生行であるとされる。なお、三輩はすべて至心願生者であり、『寿経』の後方に説かれる仏の五智を疑う往生人とは区別される。また、『観経』の九品と三輩を「開合の異なり」の関係とする。

・聖人の往生：讚重偈

続いて他方の仏国土から極楽へ来往する菩薩について述べる。阿弥陀仏の威神力を諸仏は称歎し、自国の菩薩を極楽に向かわせ、阿弥陀仏の説法を聞くように勧める。東方の諸仏国が例示され、菩薩たちが極楽に集い供養し教

えを聞き（帰国後に）説法教化するという南西北四維上下の諸仏国土の菩薩も同様である（一四二～一四三頁）。このことに関して釈尊は、五字一句、四句一行、三十行の偈頌（讚重偈）を説く（一四三～一五〇頁）。

・厭欣境界

ここで娑婆世界の衆生が極樂を欣求し娑婆を厭離するように仕向けるため、釈尊は極樂の樂事と娑婆の苦しみを述べる。

・樂を挙げて欣わしむ：極樂に往生した菩薩が得る種々の功德ついて

第二十二必至補処願成就、第二十一三十二相願成就、第三十智弁無窮願成就、第二十五説一切智願成就、第五の六神通の願成就、第四十一諸根具足願成就、第二不更惡趣願成就、第二十三供養諸仏願成就、第二十四供具如意願成就、第二十五説一切智願成就、第十速得漏尽願成就を説く。また、極樂の聖衆の光明の照らす範圍は、声聞は一尋、菩薩は百由旬、觀世音菩薩と大勢至菩薩は三千大千世界を照らす。この二菩薩は娑婆世界で命終して極樂に生じた（一五一～一七三頁）。

・往生を勧める

極樂の樂事を挙げる末尾で往生を勧めるのだが、この一段から対告者が弥勒に交替する。極樂に往生すれば五惡趣を裁り、仏果に自然に至る。ところがその極樂は往き易いのに往生する者はすくない（「易往而無人」、一七一～一七三頁）。その理由が以下の三毒五惡段に示される。

・悪を挙げて厭わしむ：三毒五悪段

「然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍う」から始まる三毒五悪段では、娑婆世界の衆生が貪瞋痴の三毒によって悪業を犯し、その報いとして苦しむ様相、五悪を犯して苦しみの報いを受ける様を示す。娑婆世界が業報因果の法則（因果の必然性と自業自得性）に貫かれており、業報因果が支配する輪廻からの解脱が困難であるから、輪廻を断ち切るために極楽往生を願うように勧める。娑婆世界の様相を描く一段なので、願成就に関する記述は無い。

三毒段・五悪段は、『寿経』の他には『大阿弥陀経』、『平等覚経』に見られるが、内容上、中国的色彩を持つ語彙が用いられることから中国選述の疑いが持たれる。『寿経』に先行する漢訳の『大阿弥陀経』あるいは『平等覚経』の文を利用し、『寿経』に挿入されたと思われる。三毒五悪段の選述をインドと中国のいずれと見るかについては研究者間に見解の違いがあるが、『寿経』に先行する漢訳から挿入された見ることについての異論はない。

・三毒段

貪欲の過、瞋恚の過、愚痴の過の順で、煩惱・造悪・受苦、の順で述べる。最後に釈尊は三毒に満ち満ちた世界を捨てて、極楽に往生するように勧める（一七三―一九八頁）。

・五悪段

続いて五悪とその報を述べ、行いを但して往生を求めるように勧める。五悪とは殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒のことである。五悪と五痛（現在世の報い）・五焼（当来世の報い）の苦しみを説き、五悪を捨て、五痛を去り、五焼を離れて、五善を得させるべきことを言う。一方、そのような世界にありながら善をなし悪をなさなければ、生

死を離れ（度脱）、現世では福德を得、来世は極楽に往生し（度世）、長寿を得て（上天）、涅槃への道を得る（一九八～二三〇頁）。最後に、悪のはびこるこの世界で心と行いを正すことを勧める。釈尊在世中には、五悪・五痛・五焼を滅して五善を得させたが、自分の入滅後には、五焼、五痛が激しくなる。それ故、自分の教えに従うべきであると説く。弥勒は釈尊の仰せに従うと答える（二三六～二四〇頁）。

二―三―一、智慧

・極楽と娑婆の相互観照

ここで、阿難が再登場し、釈尊の命を承けて、西方に向かい、「彼の仏の安楽国土及び諸の菩薩声聞大衆を見た」といふ。阿彌陀仏が放った光明に包まれつつ、阿難たち釈尊の会座の大衆は安楽世界を見、安楽世界からはこの娑婆世界が見られた（二四〇～二四四頁）。

・疑惑往生

釈尊は阿難たちの所見について一一確認し、極楽に胎生者がいることを確認する。彼らは百乃至五百由旬の宮殿にいて快樂を受けている（二四四～二四六頁）。弥勒が釈尊にその理由を問うと、疑惑心をもって功徳を修して往生を願ひ、仏の五智を疑ったが、罪福（業報）を信じたので、往生して辺地の宮殿に生まれたという（二四六～二四九頁）。疑惑のために胎生となり三宝を見聞できないという不利益を被る（二四九～二五一頁）。

・他方の菩薩の往生

弥陀の問いに答えて釈尊は娑婆世界を始め十四の仏国から往生する菩薩の数を説いて、正宗分を終える（二五五～二六二頁）。

三、流通分：無上功德と特留此経

釈尊は最後に阿弥陀仏の名号を以てこの経を結ぶ。阿弥陀仏の名号を聞いて歡喜踊躍して乃至一念する者は大利を得、無上功德を具足する（「無上功德」、二六一～二六四頁）。続いて、釈尊はあらゆる仏法が滅尽しても百年間この経だけは留め置くと宣言する（二六四～二六五頁）。

如来の興世に出会うことは困難である。経道を受持したなら、所説の通りに信じて修行しなければならない、とし（二六五～二六六頁）、会座の大衆の得益を述べて本経を終える（二六六～二六九頁）。

三、法然の『無量寿経』の引用

前節にて『無量寿経』の内容を概観した。以下に法然が『無量寿経』のどの部分を用いて浄土宗を明らかにしたのかを検討したい。

浄土宗教学院から浄土宗開宗八五〇年記念事業として法然遺文出典調査のデータ（出典調査データ）が公開されている⁴。このデータを用いて『昭和法然全集』第八輯「法然書篇」を除いた『無量寿経』の引用箇所とその

回数を確認すると以下のとおりになる。⁽⁵⁾ どの著作への引用であるかは、出典調査データと対応させて確認する必要がある。引用箇所の実数を見ることで法然の引用の傾向の全体を捉えることができよう。

1	2	4	57	2	1	2	3	1	4	12	2	1	3	引用回数
正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	序分	三分科
所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行	所行		大科
勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因	勝因		小科
第二十一願	第二十願	第十九願	第十八願	第十七願	第十五願	第十三願	第十二願	第十一願	第五願	法蔵説話	法蔵説話	法蔵説話		引用箇所
三十二相願、願名のみ出す、データに採收されず。	男女を選ばないこと。	男女を選ばないこと。九品の来迎の根拠		第十八願を聞かせるため	「若不爾者不取正覺」の初出	阿弥陀仏の寿命無量の根拠、第十八願の有効期間	阿弥陀仏の光明無量の根拠	阿弥陀経の住正定聚の根拠	「下至」第十八願解釈のため。	法蔵の選択	正宗分の科文指示	選択し十劫正覚	科文指示	備考

18	1	1	1	1	3	3	1	3	3	3	3	4	1	6	3	2
正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分
所撰	所撰	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所成	所行	所行	所行	所行
悲化	悲化	極楽	極楽	極楽	勝報	勝報	勝報	勝報	勝報	勝報	勝報	勝報	勝行・勝果	勝因	勝因	勝因
第十八願成就	諸仏称揚願成就	宮殿	宝池	宝樹	寿命無量願成就	光明の称賛	触光柔軟願成就	十二光仏	光明無量願成就	無三悪趣願成就	七宝の大地	十劫正覚	勝行・十劫正覚	四誓偈	願文	第三十五願
	第十八願を知らせるためにたてた願。									第一願の成就		法蔵の菩薩行		四十八願全体		別に女人往生願を示す根拠・疑心を防ぐため

1	26	25	2	1	2	4	3	2	2	48
流通分	流通分	流通分	流通分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分	正宗分
				所撰	所撰	所撰	所撰	所撰	所撰	所撰
				智慧	智慧	悲化	悲化	悲化	悲化	悲化
末尾	独留此經	無上大利	無上大利・独留此經	略説之耳	疑惑往生	横截五惡趣	三十二相願成就	不更惡趣願成就	東方偈	三輩段
		ID11026/60第44願から流通分に移動		科文	極楽の辺地への往生。疑惑を戒める。					

・内容検討

法然の『無量寿經』の引用例は、三分科によれば、序分三例・正宗分二一一例・流通分五四例と、全体にわたって引用されているように見えるが、序分の三例は『無量寿經釈』と『三部經釈』（『古徳伝』卷四所収本）にて科文を提示するために「我聞如是」と「願樂欲聞」を引くだけで内容には触れない。この他、正宗分・流通分にも科文を指示するための引用があり、序分の三例を含めて内容に直接触れるものではない。実質的な引用は正宗分と流通分に限ることになる。

正宗分と流通分の引用例の経文に対する比率を見ると、『無量寿経』全体の分量は、序分が約九・三%、正宗分が約八八・二%、流通分が二・五%であるのに対し、引用例は、正宗分が約八〇%、流通分が約二〇%と、流通分の引用例の比率が極端に高い。

次に引用例の傾向を見てみよう。

正宗分について見ると、所行の勝因の部分が一〇二例で全体の約半分、さらにそのうち五七例が第十八願文（一部・取意を含め）であり、圧倒的に多い。また、法蔵説話の全体あるいは部分の引用が一二例ある。第五願の「下至」を引いて、『観念法門』『往生礼讃』の「下至」と第十八願の「乃至」が同じであると論証する。これらは『選択集』第三章の引文および私釈段に引用される箇所であって、選択本願念仏という法然の説く念仏の根拠を示す箇所である。これに加えて女人往生願に関係しての引用、第十七、十九、二十願の引用が若干ある。

勝行・勝果を含んで一例を引用して、法蔵菩薩の菩薩行（勝行）を説く。

所成の勝報は二三例で、願成就の根拠として十劫正覚を挙げ、同じく願成就の根拠として無三悪趣願の成就を示す。光明無量願の成就と光明の徳用、寿命無量願の成就を『逆修説法』に引用する。勝報の引用例は、概ね願成就と光明の徳用に関するものである。

続く極楽の三例は、『観無量寿経釈』での宝樹・宝池・宮殿の出典の指示である。

下巻に入り悲化の七八例の内、一八例が第十八願成就、四八例が三輩段で圧倒的に多い。第十八願成就は念仏往生の根拠を明かし、三輩段の引用は、『選択集』第四章の引文とそれに関連して、三輩の往生が共に「一心専念無量寿仏」に念仏にあることを示すのに用いられる。引用例は少ないが願成就の根拠として、第二不更悪趣願成就、第二十二三十二相願成就を挙げる。

また智慧は三例あるが、そのうち一例は科文指示、他の二例は疑惑者が辺地へ往生することを示して、疑惑を戒める（この二例は出典調査データには含まれず、齊藤が追加した）。

流通分では、冒頭の、乃至一念するものが大利を得るという一節が二四例、独留此経の一節が二六例で半ばする。それぞれ『選択集』第五章と第六章の引文に用いられる箇所であり、末尾の「靡不歡喜」は『無量寿経釈』において、科文指示に用いられる。

これらの引用例を見ると、『選択集』第三、四、五、六章に引用、言及されるところがほとんどであり、それ以外では『阿弥陀経』『観無量寿経』の経説の根拠の提示、女人往生願を別出する根拠が少数挙げられる。

一方、引用されていない部分を確認してみると、科文指示のための引用を除くと、序分の全て、正宗分の内、所成の中、極樂の大部分、所摂の内、悲化の三毒五悪段の全文、智慧の前半の疑惑往生のほぼ全ての部分と後半の不退の菩薩の往生の記事の全文が用いられない。往生の根拠と証明、娑婆世界の済度以外にあまり興味を示さないようである。引用される箇所と対比すると、引用方法に明らかな片寄りがあることがわかる。特に三毒五悪段を全く引用しないことは、同段が無くても法然浄土教が成り立つことを示している。

結語——浄土宗の『無量寿経』

『無量寿経』は念仏往生の根拠である阿弥陀仏の本願たる念仏往生願、そしてこの本願が選択された経緯を明らかにし、願が成就してできあがった阿弥陀仏とその国土の様相を述べる。それに加えて、娑婆世界という穢土にあ

る衆生の姿を示し、厭離せしめ、往生を願わせるといった内容を持つ。

そういった『無量寿経』を法然が見据える視点は、『選択集』に示される八種選択に示されるものであろう。八種選択の内、『無量寿経』に関わるものは、選択本願、選択讚歎、選択留教の三である。

選択本願は、阿弥陀仏が数多くの往生行のなかから念仏を往生行として選び取ったことである。

選択讚歎は、積尊が三輩段に説かれる念仏以外の諸行を選び捨て、念仏を選び取って「大利」「無上功德」と称讚したことである。

選択留教は、積尊が自分の説いたあらゆる教えのなかで『無量寿経』の教説に念仏以外を選び捨てて、末法万年の後には滅尽するとし、念仏のみをその先まで留め置き、永続させることである。

法然は、この三つの視点から念仏が明らかにされた經典として『無量寿経』を位置づけていたのであろう。前節で述べた引用箇所の子寄りはそのことを如実に示していると思われる。

そしてこの視点から読み込むことで、浄土宗の『無量寿経』の姿が浮かび上がることになる。

註

(1) 以上の諸説については、香川一九八四七〜三三頁、香川一九九三七〜八四頁、藤田一九七〇六一〜九六頁、藤田一九九四二三〜四〇頁、藤田二〇〇七七六〜八七頁を参照。

(2) ここに用いられる「浄土」は『無量寿経』中唯一の用例であり、阿弥陀仏の国土を指していないことは明白である。

(3) 『大智度論』巻十に法蔵説話に類似した説を引く。法積比丘（法蔵比丘）の功徳力が薄くて「上妙清浄の世界」

を見ることができなかったため、そのサンプルから建立された世界もそれほどすぐれたものではなかった、という（正蔵二五、一三四中）。『無量寿経』でも『大阿弥陀经』でも法蔵に提示された国土は世自在王仏が事前に取捨選
択したものであつて、すべての仏国土をみせられたわけではないので、『大智度論』の説は、論理的には整合する。

(4) 法然遺文出典調査 : <https://acad.jodo.or.jp/> 法然遺文出典調査 /

浄土宗教学院 開宗八五〇年事業 法然上人遺文出典調査資料 (バージョン0.9).xlsx

(5) データ整理は次の手順で行った。『無量寿経』を出典とする行をすべて抽出し、各行をデータに記載された『無量寿経』本文の浄全・正蔵・聖典のページ番号順に並べ替え、『無量寿経』の同一ページ内の順序を確定するため
に『無量寿経』本文と突き合わせて並べ替えを施し、【】内に引用箇所(例えば願名など)記載したデータを作
成した。続いて【】のみのデータを作成し、同じ引用箇所をまとめて引用回数とした。

参考文献

香川孝雄、『無量壽經の諸本對照研究』、永田文昌堂、一九八四年

香川孝雄、『浄土教の成立史的研究』、山喜房佛書林、一九九三年

藤田宏達、『原始浄土思想の研究』、岩波書店、一九七〇年

藤田宏達、『無量寿経 阿弥陀经』(浄土仏教の思想)一、講談社、一九九四年

藤田宏達、『浄土三部経の研究』、岩波書店、二〇〇七年

Kotatsu FUJITA THE LARGER AND SMALLER SUKHAVATĪYŪHA SŪTRAS Kyoto HOZOKAN 2011

キーワード 『無量寿経』、本願、願成就